

作品ID	巻	内容	所有	出版社
93	はやぶさ新八御用帳(1) 大奥の恋人	南町奉行、根岸肥前守の内与力である隼新八郎は、かつて屋敷に奉公していたお鯉を実家に訪ねます。妻を娶り、お鯉が暇を取ってから、お鯉を好きだったことに気が付いた新八郎ですが、どうするわけにもいきません。帰り道に、新八郎は何者かに襲われます。後に、淀橋で日本橋の菓子屋の主人が死体で浮かびます。この鶴丸屋清兵衛の妹は大奥に奉公していました。その後、続けて死体が見つかり、そしてついに、鬼子母神に参詣した大奥御年寄の音羽が扼殺されるという事件が起こります。大奥に関わる事件で、町方が手を出しかねている際、新八郎の妻の兄、神谷鹿之助は、お鯉を大奥に奉公させるこ		文春文庫
94	はやぶさ新八御用帳(2) 江戸の海賊	新八郎は、本所方の同心・高丸龍平と緋桜小町のいるさくら茶屋に入ります。緋桜小町ことお小夜と叔母のお柳らとお茶を飲んでいるとき、雨が降り、落雷します。しばらくして雷がおさまったとき、店にはお高祖頭巾の女の死体がありました。それから十日ほどが過ぎ、伊達藩の御用船が海賊に襲われます。その後、荷揚げ舟を扱う湊屋が襲われ、高丸の妻子が殺されます。そして、お高祖頭巾の女の身元を調べていた同心の平泉が殺されるなど、事件が続きま		文春文庫
95	はやぶさ新八御用帳(3) 又右衛門の女房	「又右衛門の女房」大地震が起きました。用人の高木良右衛門の娘の千加は、夫の又右衛門が先に逃げてしまったのが不満のようです。		文春文庫
96	はやぶさ新八御用帳(4) 鬼勘の娘	「鬼勘の娘」新八郎は勘兵衛の家で、勘兵衛の娘・小かんことお初に会います。後日お初は、青木家の相続争いの話を持っ		文春文庫
97	はやぶさ新八御用帳(5) 御守殿おたき	「御守殿おたき」永田屋光兵衛のところに滝の井という奥女中が訪ねてきて、光兵衛が十八年前に拾った女の子・おえいは、松平下総守のご落胤だと言います。殿に對面する費用が支払われますが、詐欺でした。その後、お初が光兵衛の評判を新八郎に伝えます。		文春文庫

98	はやぶさ新八御用帳(6) 春月の雛	「春月の雛」人形師・春月の作った雛に魅入られて、二人の女が死んだという話を、肥前守が新八郎に話します。新八郎は、大久保源太と人形屋の京屋へ出向きます。	文春文庫
99	はやぶさ新八御用帳(7) 寒椿の寺	「寒椿の寺」旗本・本庄新兵衛が、板倉屋の寮で殺されます。新兵衛は、板倉屋の娘・お栄と祝言をあげるどころでした。	文春文庫
100	はやぶさ新八御用帳(8) 春怨 根津権現	「春怨 根津権現」旗本の森川家では、二代続けて当主が早世し、御坊主の山崎要俊の弟・直三郎が養子に入ります。ある日、直三郎が食当たりを起こし、要俊は、毒を盛られたのではないかと疑いました。	文春文庫
101	はやぶさ新八御用帳(9) 王子稲荷の女	「王子稲荷の女」王子稲荷で狐火と白い着物を着た女が目撃されます。その後、女が斬られる事件が起きますが、人々が駆けつけたときには、死体は消えて	文春文庫
102	はやぶさ新八御用帳(10) 幽霊屋敷の女	「幽霊屋敷の女」御番所に届けられた酒に毒が入っていて、死者が出ました。その後、権勢を誇る水野出羽守の屋敷前に雪達磨が作られ、その中からお出入りの医師・滝川元信が死体となって発見されました。	文春文庫
103	はやぶさ新八御用旅(1) 東海道五十三次	鷹司家の慶事に肥前守の代人として祝物を届けるため、新八郎は京へ赴くことになります。しかし新八郎には、お家の大事のために国許へ向かった藤堂家の姫君をさりげなく護衛するという、密かな任務がありました。途中、戸塚で供の治助が病に倒れたとき、姫君と病気の乳母という女たちを見かけたり、箱根で姫君を守る者たちと襲撃者との戦いがあつたりします。一方、新八郎と治助は、女旅芸人のお吟や、伊勢屋の番頭を名乗る伊兵衛と妻のお松、娘のお鈴と道連れになります。やがて新八郎たちの一行は、谷に落ちた稀世という、姫君らしき女を助けます。稀世は新八郎に、浜松	文春文庫

104	はやぶさ新八御用旅 中仙道六十九次	鷹司家の慶事のため京に行った。新八郎は、京都町奉行所同心・土屋兵介の妹・小篠の家に滞在して、鷹司家の雪路(加賀)と探索に歩きます。ある日、小篠は禁裏付与力の押田内匠のところに奉公に出ると言います。押田は、小篠の歿った夫・伏木要一郎の上司で、伏木は押田を探っているうち、川へ落ちて死んだのでした。京での調査が一段落し、中仙道を通って江戸へ帰る途中も、新八郎は様々な事件に巻き込まれます。	文春文庫
105	はやぶさ新八御用旅 日光例幣使道の殺人	新八郎は根岸肥前守から、日光例幣使の滋野井公敬の一行の人数が、守山の宿で一人減ったという噂を聞きます。その後、また一行から一人姿を消し、しかも死体になって発見されます。しかし、供人の人数には変わりがありません。そのような話を聞いているうち、鷹司家の書状を持参しているという、村井彦四郎を名乗る男が肥前守を尋ねてきます。手紙は、新八郎に助力を求めていました。新八郎は、例幣使道へ行く決心	文春文庫